

## 233. 海外研修参加記 北京・西安の遺址と文物(前編)

### 1. はじめに

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックでは、平成4年度より各法人の所属職員を対象とする「文化財保護研究者訪中団」を結成して、海外研修を実施してきた。今年度は3回目を迎え、中華人民共和国の首都北京市と旧都西安市近郊を中心とし、平成6年11月2日から11月9日までの7泊8日の日程で行われた。参加人員は、福岡澄男団長(財・大阪文化財センター)、藤田憲司副団長(財・大阪府埋蔵文化財協会)、宮本佐知子秘書長(財・大阪市文化財協会)以下8法人の総勢19名であった。

滋賀県は、古墳時代から歴史時代を通じて渡来文化の色彩が濃厚に認められるとされてきた地域のひとつ

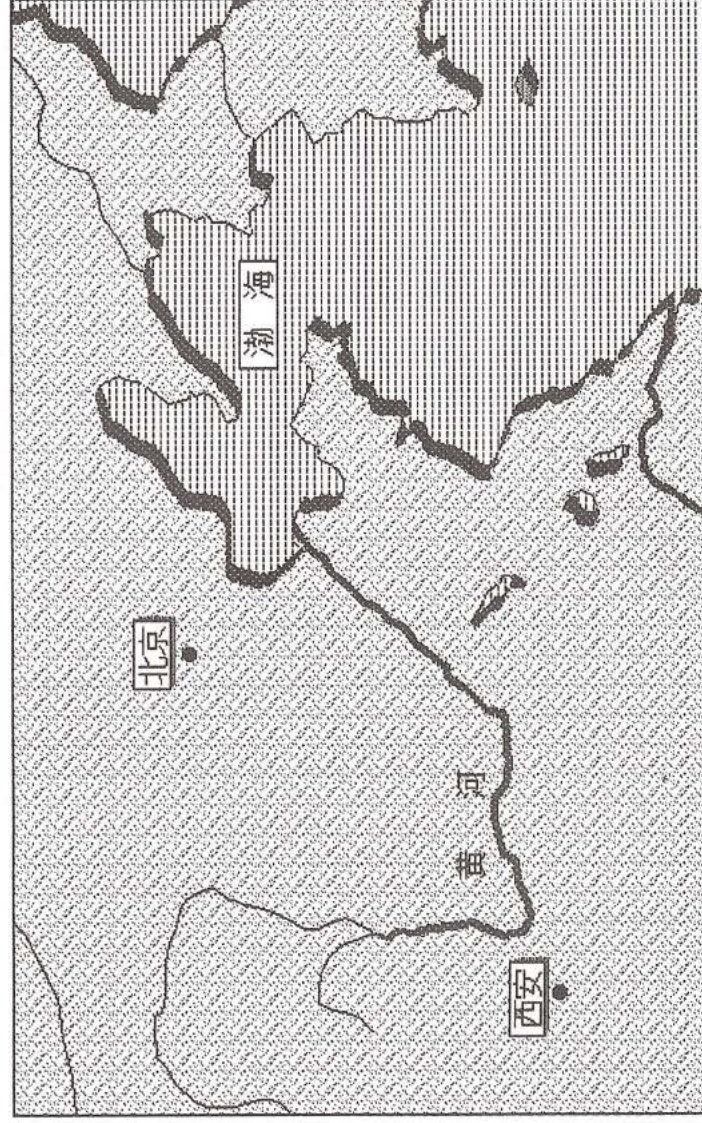
である。したがって、中国大陸や朝鮮半島の遺跡、遺物についての調査研究の必要性を痛感するに否かではないが、日頃、眼前の発掘調査や整理作業に追われ、今回の研修に参加するにあたっても充分な予備知識を貯えて臨んだとは言いがたい状況であった。

しかしながら、終始好天に恵まれ、中国側の各施設の関係者の方々のひとつかたならぬ尽力を得て、きわめて充実した快適な研修旅行が過ごせたことは何よりであった。

以下に、今回の研修旅行で訪問したそれぞれの遺跡や博物館、研究施設等について日程を追って概要を紹介するとともに、いささかの所感を綴ることで研修報告の責を盡ぐことにしたい。

### 2. 北京市内・近郊 [11月2日(水)] 中国社会科学院考古研究所

平成6年9月に開港したばかりの関西国際空港を午前10時10分に出発し、北京空港には現地時間の午後12



北京と西安

時40分に到着する。日本との時差は、ちょうど1時間であり時計の針を後戻りさせる。

昼食の後、今回の研修旅行でいろいろと便宜を図っていただくことになる中国社会科学院考古研究所を表敬訪問する。同研究所は1950年に設立され、現在は任式楠所長・鳥恩副所長以下、194名の研究員を擁する。

研究所内部は原始社会考古研究室、商周考古研究室、漢唐考古研究室などに分けられ、年間中国国内の10数個所で発掘調査を実施している。文字通り、中国における発掘調査技術および考古学研究の中心的施設である。研究所の概要説明を受けたあと、出土遺物の展示室を見学する。所員はいずれも発掘調査の前線に在る方々であり、言語と国情の違いはあれ、現場に立つという一点で共通基盤を感じ取ることができたように思

う。夜には、研究所の主催に成る盛大な歓迎の宴が催された。

#### 満城漢墓・燕下都遺址 [11月3日(木)]

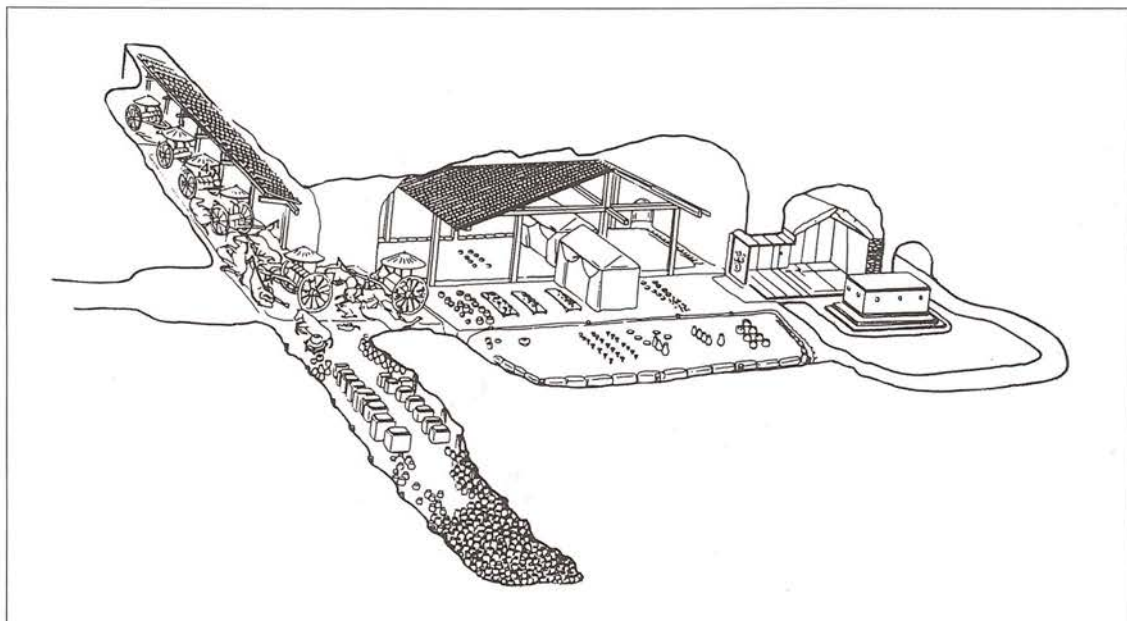
午前7時50分に北京での宿泊施設である国際飯店を出発し、バスで京石高速道路を経由して約3時間かけて河北省満城県にある満城漢墓に到着する。麓からリフトに乗って、同墓が営まれる山上へと向かう。

満城漢墓は、前漢中期の中山靖王劉勝の墓(1号墓)とその婦人竇綰の墓(2号墓)である。石灰岩からなる自然の山丘を部分的に成形して墳丘とし、その山腹にともに東に開口する墓室を穿っている。1968年に工事中発見され発掘調査が行われた。南側に位置する1号墓は、墓道・甬道・南北の耳室・中室・主室で構成され、全長約51.7m・最大幅約37.5m・最大高約6.8mの規模を有する。中室内には瓦葺きの木造建築が建てられていたことが明らかにされた。主室は、棺が安置される寝室であり、周囲には岩盤を削り貫いた回廊が巡らされている。南側に設置された側室は浴室を象徴するという。

2号墓も1号墓とほぼ同じ規模を有するが主室は中室の南側に設けられており、車馬や酒器を納める耳室が1号墓より大きく作られている。二つの墓室からは、金・銀・銅・鉄・玉製品をはじめとした膨大な量の副葬品が出土したほか、遺体には「金縷玉衣」と呼ばれる玉片を金糸で連ねた衣がまわられていた。墓室内には建築物や副葬品の状況などがレプリカで再現されており築造当時の様子がうかがえる。容積は3,000m<sup>3</sup>にもおよび岩盤掘削に要する当時の労働量と、複雑な墓室



満城漢墓・靖王劉勝の墓(1号墓)入口



満城1号墓(靖王劉勝の墓)復元図

構造、さらには精緻を窮めた副葬品の数々にただただ圧倒されるばかりであった。

下山後、ふたたびバスに揺られて河北省易県の東南に位置する燕下都遺址に向かうが、到着時にははや落日寸前であった。同遺址は、北易水と中易水の間であり、戦国時代燕（前323～前222）の昭王が築いたとされる。その名から上都（現在の北京）に対する、軍事的拠点としての陪都の性格を備える。遺跡は東西の二城から成り、居住域と生産域の中核である東城は南北約4km・東西約4.6kmの矩形を呈している。

城内には武陽台を中心とする宮殿地区や、近年の発掘調査で明らかにされた鉄器製作場・武器製作場などの工房地区、居住区、墓域などが配置されている。西城は、南北約3.7km・東西約4.5kmの規模を有し、東城に対する防御的な附郭であると考えられている。

燕下都文物保管所で遺跡の概要説明を受けている間に日没となり、現地見学を断念して最近の出土資料を見学する。帰途、夕闇のなか宮殿遺構を遠望したが、目前で遺跡に直接立つことがかなわなかっただけにかえって印象深い一日となった。

### 3. 北京から西安へ [11月4日(金)]

#### 盧溝橋

午前8時に国際飯店を出発し、当初の予定にはなかった盧溝橋へ立ち寄る。同橋は、北京の市街地の南西約15kmにある永定河に架かる全長266.5mのアーチ形の石橋である。金代に架設され、マルコ＝ポーロの『東方見聞録』にも記された名橋である。現在は、車輛の通行は禁止され、橋の中央部に轍が刻まれた敷石が並べられ往時の股賑を偲ばせている。1937年日中戦争のきっかけとなった、盧溝橋事件(七七事件)の舞台でもある。折しも、事件に題をとった映画の撮影現場をあとにして次の見学地である大葆台漢墓博物館に向かう。

#### 大葆台漢墓

同漢墓は、北京市丰台区に所在し、1974～75年にかけて発掘調査が行われた。1号墓は、漢の燕王(廣陽王)の陵墓と見られている。墓室は、墓道・甬道・前室・後室で構成され、前・後室の周囲には回廊が巡らされる。さらにその内側には、長さ90cm・幅10cm・厚さ10cmの黄腸題湊と呼ばれる角材を南北14.2～16m、東西9～10.8m、高さ3mにわたって壁状に積み上げている。

墓道からは、実用に供された儀仗車・乗車・喪車の3輛の馬車と11匹の馬骨が検出されている。墓室は復元され、墓道の殉葬馬車の出土状況とともに全体が博物館として展観できるようになっている。

#### 遼金城垣博物館

考古研究所の馮浩璋氏の計らいでこれも予定外であったオープン前の遼金城垣博物館を訪れることがで



燕下都文物保管所にて



盧溝橋



大葆台漢墓博物館・墓室復元展示



大葆台漢墓博物館・漆製品の展示



遼金城垣博物館



木材の保存処理作業



故宮博物院

きた。北京市文物研究所・趙福生副研究員の説明によると、建設工事の事前調査によって、金代の中都の南城壁をくぐる水門に伴う敷石や胴木、木杭などが検出され、現在遺構ごと現地保存し博物館として露出展示するとのことである。

博物館地階に設けられた水門ないし堰の遺構展示室には、石敷の河床および河岸を構成する個々の石が蝶形の鉄の楔で固定され良好に遺存していた。また、護岸ないし上部構造の基礎となる木材や護岸用柱列は、劣化防止、亀裂止めなどの目的で保存処理が実施されていた。

保存に使用されていた薬剤については詳しく聞くことができなかったが、指につけた感じから、水溶性の接着剤に防腐剤を加えたいわゆる科学糊の類のようであった。さらに展示目的のため土層を現状のまま固化したのも見られた。地下遺構であるにもかかわらず、現状ではある程度乾燥した環境であるからこうした保存の工法が有効なのであろう。

開館前の最も忙しい期間にもかかわらず、貴重な水門遺構と実際の保存処理作業を見学することができたことは大変勉強になった。

#### 故宮博物院

公園内での昼食後、社稷壇<sup>しやくじくだん</sup>、中山堂を経て午門から故宮博物院へ入る。紫禁城ともよばれた故宮は、明・清代の現存する宮殿として最大規模のものである。明の永楽帝が1420年に完成させ、以後清の末代溥儀<sup>ほんぎ</sup>にいたるまでの約500年間で24代の皇帝が居住した。

周囲には、高さ約10m、延長約3kmに及ぶ城壁と、さらにその外側には、幅52mの堀が巡らされている。全体の面積は約72万㎡を占め、宮殿建築は9,000室余りを数えるという。城内は南北の中軸線上に主要な宮殿が並び、その他の建築物も左右対象に配置されている。

主要宮殿は、太和殿・中和殿・保和殿を中心とする外朝部分と、乾清宮・交泰殿・坤寧宮から成る内廷部分で構成される。清朝滅亡の後、宮廷所蔵品を基礎として1925年に正式に故宮博物院が発足することになり、宮殿建築の修理や収蔵文物の拡充を重ねて中国最大の博物館として今日にいたっている。

今回は時間の都合上、午門から中軸線に沿った主要な宮殿建築を足早に見学することしかできなかったが、その雄大さと壮麗さは筆舌に尽くしがたく世界の文化遺産たるにふさわしいものである。

この日はひとまず北京に別れを告げて、午後5時15分発の中国西北航空機で一路夕暮れの西安へと向った。

#### 4. 西安市近郊の遺跡と博物館 [11月5日(出)]

##### 中国社会科学院考古研究所・西安研究室

西安での宿泊場所である西安賓館を午前8時30分に出発して、まず中国社会科学院考古研究所西安研究室

への表敬訪問を行う。張連喜副主任より、研究室の沿革や概要の説明を受けたあと、竜山文化期の遺物、車馬具に関する青銅器などのテーマ別に分けられた展示室を見学する。この日は西安研究室の馮孝唐氏の案内で、西安市周辺の多くの遺跡を見学することができた。

#### 曲江池遺址・天壇遺址・明德門

曲江池遺址は、西安市の中心から南東約5kmの低地に所在する。隋代に人工的に開削された池沼で、その屈曲した形状から曲江池の名がある。唐代には宮殿樓閣が立ち並び、上巳（3月3日）、中元（7月15日）、重陽（9月9日）には、皇族や貴族高官らが訪れ宴遊を楽しんだ所である。天寶年間（742～756）安史の乱によって破壊され、唐末には廃された。現在は田園地帯となっており、彩霞亭・紫雲樓の遺構を残すのみとされる。考古研究所西安研究室によってボーリング調査が行われ、現地表下3m前後で泥土の堆積が認められたという。

天壇遺址は、長安城南郊外に所在し、唐代より毎年冬至の日に皇帝が訪れて壇上より南方を向いて天を祭った場所である。圓丘壇とも称され、全体の構造は、四段築成の同心円形を呈する。ボーリング調査によれば、最基底には磚が敷き詰められ、壇の版築の厚さ

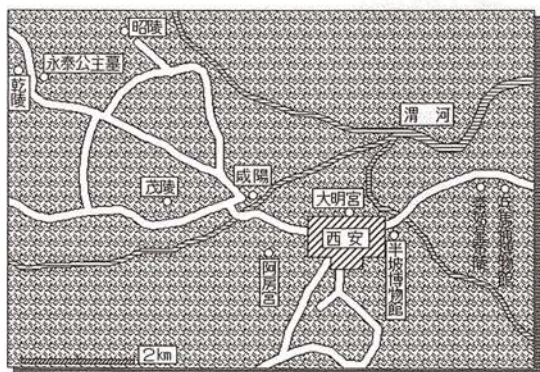
は13.8mに及ぶという。

明德門は現在の西安市南郊の楊家村に所在する唐長安城南正門であり、北に位置する宮城とは朱雀大街で一直線につながっている。1972～73年にかけて、西安研究室による発掘調査がおこなわれている。城門の規模は、東西約55.5m・南北約17.5mを測り、五つの門道が開いている。各門道の幅は5mで、その間には、厚さ約2.9mの版築台と門道の両側には門柱が備えられ、門道のなかには切石の敷居が存在した。中央門道の敷居石には彫刻文様が施されることから皇帝専用の御道とされる。現在、明德門址は埋め戻されていて、住宅地の中にはずかに墓壇状の高まりと門址を示す標石が残されている。

#### 大明宮・麟德殿・含元殿・未央宮遺址・阿房宮遺址

大明宮は、「東内」とも呼ばれ唐長安城の北東部龍首原に営まれた。唐の太宗が父親の李淵の夏宮として、貞觀8（634）年に造営した。東西約1.5km、南北約2.5kmの規模を有し、正門は丹鳳門、正殿は、含元殿である。

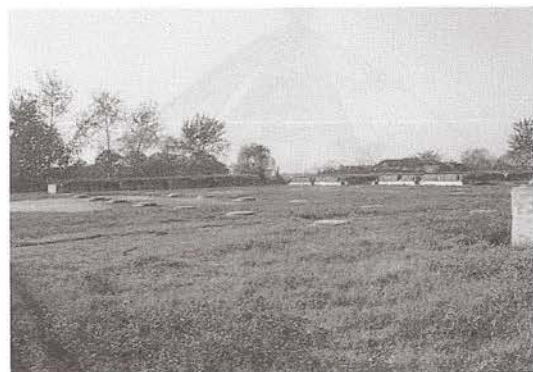
麟德殿は、大明宮北部の太液池の西方の高台に営まれ、高宗の麟德年間（664～665）に築造されたためにこの名がある。皇帝が貴族や外国使節に謁見したり、大宴を催した重要な施設である。建物は、東西約77m、



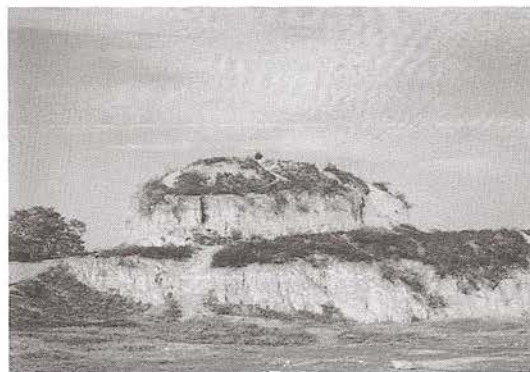
西安市内地図



麟德殿址にて



大明宮・麟德殿址



大明宮・含元殿址

南北約130mの規模を持ち、前・中・後の三つの部分から構成される。長安2(703)年には、則天武后が日本からの遣唐使粟田朝臣真人を接見したことが知られている。現在は、二重の基壇や礎石列などが復元整備され、傍らの大明宮遺址保管所には宮域の復元模型などが展示されている。

含元殿は大明宮前面に位置する正殿であり、国政や軍事に関する重要な政務や儀式が執り行われた建物である。東西約76m、南北約42.3m、高さ約13mの広大な基壇上に、桁行11間・梁行4間(約46.7m×約19.4m)の殿舎が建てられていた。全体の建物配置は、左右対称で、両側には2条の廊道があり東の翔鸞閣、西の棲鳳閣に通じている。

基壇中央から正門の丹鳳門にいたるまでには、長さ約75mわたって3条の通路からなる龍尾道が築かれている。現在は基壇を残すのみであるが、雄大かつ壮観な大明宮の正殿を偲ばせるには充分である。未央宮遺址は漢の長安城の西南部に営まれた同城の主要宮殿の一つである。漢の高祖(在位前202~同195)の時に造営され、新・西晋を経て隋の初頭までの王朝の政治の中心として栄えた。前殿の基壇は、東西約200m、南北約350m、高さ10m以上の規模を有している。周辺からは「長楽未央」、「長生無極」と刻された瓦当などが出土している。

阿房宮遺址は、西安市の西方郊外に所在する。秦の始皇帝は咸陽城に代えて渭河の南岸に新たな宮殿の造営を企図したが、生前に完成したのは阿房宮のみであった。二世によって造営は継続されたが、楚の項羽によって焼失するにいたった。

周辺では、折しもボーリングによる範囲確認調査が行われており、夕刻にもかかわらずその実際を見学することができた。細長いスコップに長い木の柄を取り付けた道具で、時には20mほどの地下土層のサンプリングが可能である。こうした調査は、とりわけ版築を

主体とする遺構の確認において多大の有効性を発揮することは各地の遺跡で証明されている。

## 5. 西安近郊 [11月6日(日)]

### 半坡遺跡

午前8時30分に西安賓館を出発する。この日の研修は、前日とは一転して博物館見学が中心となる。

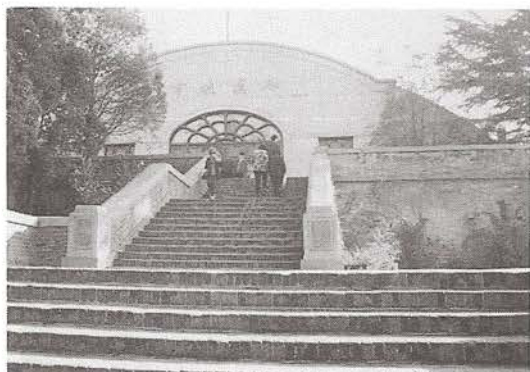
半坡遺跡は、西安市の東郊に位置する約6,000年前の新石器時代に属する仰韶文化期の標識遺跡として日本でも夙に知られている。1954~57年に発掘調査が行われた。その結果、遺跡の面積は、5万㎡に及び、深さ5~6mの濠に囲まれた集落内は居住区、製陶区、埋葬区に分れていることが明らかになっている。住居は円形の地上式建物と方形の半地下式建物が認められる。出入口はいずれも南側に開き、中央には炉を備え、壁はスサ入りの粘土で築かれる。出土した陶器には赤地に黒で文様を描いたものが多く、簡単な符号を彫り込んだものもある。検出遺構のうち、住居45棟・陶器焼成窯6基・貯蔵穴200基・墓200基余りが半坡博物館として保存展示されている。

(中川正人・田路正幸)

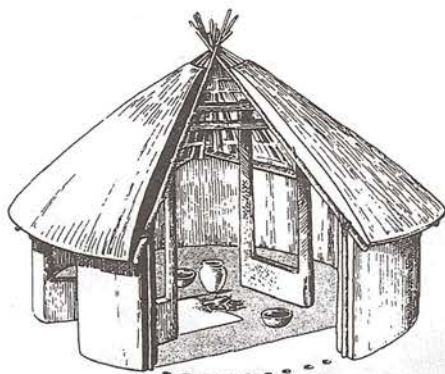
(次号へつづく)



半坡遺跡・復元住居



半坡遺跡博物館



半坡遺跡・円形住居復元図